

# 現代小説のレトリック・文体

——松本侑子『植物性恋愛』における〈構造〉と批評性——

佐藤 洋 一

はじめに

近年の「文化批評」（カルチャラル・スタディーズ）の観点からの『近代』の見直し、また、近現代文学史を読みかえる試み等（注1）にも表れているように、現在では、従来の文学批評論や作品研究方法論の見直しと再構成が求められている、一つの転換期にあると言えるだろう。

現代文学（小説）は、その範囲をおよそ戦後の小説と区切っても、この五〇数年の間には多様な相貌を示している。例えば、大岡昇平や井伏鱒二から古井由吉、大江健三郎、安岡章太郎、中上健次等はそれぞれ、小説の発想と方法も異なり一括りに論ずるこのできない多面性をもっている。とりわけ、一九七〇—八〇年代に登場した島田雅彦や村上春樹等の戦後生まれの作家、山田詠美等の女性作家による作品は世界認識や文化状況の変化を背景にした実験的な作品が多く、いわゆる「戦後文学」とは明らかに異質な要素をみとめることができるものである。

一九八〇年代後半にすばる文学賞受賞作『巨食症の明けない夜明け』（一九八八年一月、集英社、注2）でデビューした松本侑子も（一九六三年生まれ）、この時期から増加した女性作家の一人であり、現代女性の自己アイデンティティの行方と問題を独特の角度と方法で描いている一人である。

本稿は、現代小説のレトリック・文体研究の観点から、松本侑子の第二作『植物性恋愛』（一九八八年一〇月、集英社）を取り上げ、その〈構造〉と批評性等について考察するものである。

## 1、性暴力と文体・構造

この作品は、女性の愛と性の分裂を通して、「性暴力」と「恋愛」の背後にある現代人のアイデンティティ獲得の苦悩を、フェミニズム思想を踏まえながら描いた作品である。

この作品についてのまとまった作品論はほとんどみることが

できないが、性暴力（性的虐待）と現代女性のアイデンティティ探究（自分探し）という題材のもつ現代性のため、社会学・フェミニズムの視点から、あるいは、制度と文化論の枠組みから語ることが可能である。

もちろん、こうした論点の意義は、作品のアクチュアリティとともに、解釈の多義性の可能性を示すものであるが、文学作品としてのアクチュアリティを支えているのは、話題（題材）のもつ今日の問題提起よりは、それら生かしている構造としての文体やレトリックの特質・方法の構造的魅力でなければならぬことは言うまでもないことである。

## 2、表層と深層

『植物性恋愛』の主人公は、一〇歳から大学生までの沙江子という女性である。一〇歳の美しい春、「性的虐待（強姦）」の被害者となった少女は、その後、愛と性の分裂に悩み、男性（性器）憎悪と去勢願望を持ち、悪夢にうなされるようになる。男への「不毛な復讐遊戯」に耽る心の荒涼等を経験し、大学生になる。

こうした苦悩と分裂の深層には、一方には「性暴力」とその被害者の歪んだ支配・被支配関係という形で「制度」への批評が、一方では、「私は人間になれるのかしら」「愛されたい、しかし支配されたくない。」といった語りにみられるような現代女性としての肯定的アイデンティティ（自己像）形成の困難

と課題を語る視野がある。

作品の構図は、子供から少女へ、少女から大人の女へといった形で、少女期の性暴力を軸にした女性の「成長物語」「自分探し」の枠組みをもって描かれている。

また、物語を構成する主要な「事件」としては大きく五つの内容がある。一つは一〇歳の時に受けた沙江子の「性的虐待（少女強姦）」事件である。少女時代に性暴力を受けた女性は、その後どのように自己のセクシャリティを形成し、成長していくのか、という想像力からこの作品は始まっている。このような問題設定自体に作者の思想と今日の問題提起がある。

二つ目は、不能者である中年男性・有村との出会いと関係であり、三つ目は恋人の大学生シンとの関係、そして四つ目が沙江子と類似した「性暴力」の被害者であり、同時に加害者でもあるゲイの光という男性との関係である。

セクシャリティ形成の過程として、内なる欲望（性と愛）の自然さを受け入れる（肯定する）ことと、本来の自分自身（アイデンティティ）喪失の危機感覚・存在感覚の分裂と不安が描かれる。

## 3、《解体》崩壊型と《関係》発見型の構造

「はじめに」でも触れたように、戦後以後の、いわゆる現代小説には第一次戦後派と呼ばれる世代から第三の新人・内向の

世代、そして、大江健三郎・村上春樹・山田詠美・池澤夏樹等多様な作家がいる。これらの作家はそれぞれの時代と社会背景を背負って作家活動をしているわけであり、中心となる題材（素材）や文体の発想、その方法やモチーフも様々な形をとっている。

戦争体験を軸にした国家と個人の関係、戦争における真実、家庭という小世界の中の個人、黒人という異文化を通しての現代の人間像の表現等は異なっているが、小説の《構造》という面からみると、大きな断層が第三の新人あたりにみられるように私には思われる。それらをここでは、《解体》崩壊型と《関係》発見型と二つに分けることを手がかりに『植物性恋愛』の現代小説の構造と表現の特色を考えてみたい。

### (1) 《解体》崩壊型の小説

《解体》崩壊型の小説とは、一言で言えば、ある観念や行動規範、生き方等を生きる中心人物（主人公）が、幾つかの事件を経て既存の価値体系や思想（感性）が解体し崩壊する過程を描く型の作品のことである。設定される事件やエピソードは、戦場や銃後（内地）における戦争体験であったり、家庭的な小事件の連続、あるいは、異文化体験の虚構化であったりする。いづれにしても、作品の末尾は、主人公の死・狂気・自殺等破壊型の悲劇的結末をとることが多い。いわゆる悲劇（死・破壊）による批評性を作品の構造的性質としてもつ作品群である。

また、中心となる人物は、作品に登場する段階では、既にある程度自己形成ができている人物が設定されることが多く、《関係》発見型の作品が自己形成のまだ不十分な少年や少女、青年等の若い人物が中心人物として設定されることが対比的である。

このような型の小説は、自己形成を終えた人物（大人や青年等）が「事件・エピソード」との出会いを通して、既存の価値観やそれを支える国家や思想の秩序を批評することに作品のねらいがあり、特に、中心人物の変化（精神の解体や死、狂気等）という形で、既存の価値観や思想のグロテスクさや不合理性を批評、強調するための表現装置と言えるものである。代表的な作家としては、野間宏・大岡昇平・武田泰淳・三島由紀夫等の戦後作家、そして、二つのタイプに跨がる時期の作家として安岡章太郎・遠藤周作・吉行淳之介・庄野潤三等の第三の新人があげられる。

### (2) 《関係》発見型の小説

一方、《関係》発見型の作家は、第三の新人以後、古井由吉を典型とする内向の世代、日野啓二・大江健三郎、そして、干刈あがた・村上春樹・村上龍・山田詠美（注3）・島田雅彦・中上健次・吉本ばなな・池澤夏樹・松浦理英子・小川洋子・笹野頼子・鷺沢萌等があげられる。

例えば、安岡章太郎『ガラスの靴』『海辺の光景』（注4）、

古井由吉『杵子』、日野啓三『夢の島』、村上春樹『ノルウェーの森』、村上龍『限りなく透明に近いブルー』、島田雅彦『忘れられた帝国』、吉本ばなな『キッチン』、池澤夏樹『ステイルライフ』等にはほとんど共通した特色としては、ある喪失感といった存在感覚の曖昧な中心人物が、何人かの人物・事件との出会い（《関係》）を通して、自分の本当の存在感覚・生き方のモデル・他者との関係（接点）を「発見」していく、あるいは現代社会における自己像（アイデンティティ）発見のきっかけを、つかんでいく過程が描かれるということである。

自分の真の存在感覚発見の過程は、表層的にはいわば若い中心人物による「自分探し」「成長物語」の枠組みによる過程として描かれることが多い。肯定的自己像（アイデンティティ）のありかは、既存の社会の常識・秩序・価値観とはズレるもの、対立するものであることが多く、そこに作品の批評性が生まれるわけだが、事件（エピソード）や他者との《関係》を通して、内部の本当のものを見つけること、他者との《関係》という「経験」を通して成長することは、既存の価値観や生き方の解体や崩壊によって作品のリアリティーと批評性を獲得している《解体》崩壊型の小説の構造とは、対比的な性質といえるものである。

もちろん、全ての作品がこうした二タイプに、すっかり分けられるわけではない。短編や長編の構成方法や、取り上げられる時代背景との関係、あるいはどのような中心的モチーフで小

説が発想されているか（批評性の方向）等によって、いろいろな組み合わせがあるのが事実である。例えば、《関係》発見型の中心人物を《解体》崩壊型の対比的な人物が強調するとか、《解体》崩壊型の中心構造の中に《関係》発見型の人物を位置づけることで、「現実」の多様性を語る等の特色もみられる。

しかし、巨視的にはこうした観点からをみることによって、戦後小説と現代小説の特質や意義、人物造型の方法・作品の批評性・文体やレトリックの個性・時代背景と人物設定の意味等をかなり、整理してとらえることができそうである。

### (3) 基本的構成と方法・観点

《関係》発見型の小説には、おおよそ、次のような基本的な構成と方法の特色をみることができる。

冒頭のエピソード

象徴的なイメージと場面

○ 作品全体を暗示するような象徴的な場面やエピソード、イメージ等が描かれる。省略されることもある。

状況設定

中心人物の“ある欠落”と時代背景

- (1) 舞台・人物・事件等の状況設定の場面である。
- (2) ある事件による自己喪失や存在感覚の曖昧な人物が設定さ

れることが多い。時代背景・舞台と人物の関係の意味、人物の“ある欠落”(顕在化していない自己像の歪みや分裂)の提示と根拠が、後の人物像の変化の前提となっているという意味で重要である。

#### 展開の場面1

人物・事件との出会い

- (1) 中心人物がある人物(事件)と出会い、関係を作り始める段階である。
- (2) 展開(1)(2)の場面は、作品によっていくつかの段階が設定される。

#### 展開の場面2

人物・事件との「関係」の展開

- (1) 展開(1)がさらに発展し、他者(世界)と自己との関係を発見する過程が段階的に描かれる。
- (2) その心理描写は「内部」の感覚の変化として、例えば感覚・欲望・身体(肉体)の変容として描かれることが多い。「外部」の描写は自然や空間・時間の描写の変化(自然の見え方)等として描かれる。
- (3) これは、現代小説の心理描写が意識(現実、日常性)と無意識(夢、幻想、非日常性)の二重性の方法によって描くという特色によっている(注5)。

#### クライマックスの場面

《関係》の発見と変容

- (1) この場面は「展開(2)」の場面に含まれることもあるが、現代小説らしい文体やレトリックの特色、作家の个性的方法が顕著に表れる場面である。

- (2) 特に、中心人物の《関係》の発見が時にアイロカルに、これまでの生き方に対する疑問として、あるいは既存の制度や、従来の自己像への抵抗として提示され描かれることが多い。

- (3) 描写の特質は、展開(2)で指摘したような幻想や夢、自然描写等が劇的に描かれ、内部と外部の両面での中心人物の変容が語られることが多い場面である。

- (4) また、意識と無意識の文体(二重の心理描写)とともに、国家と個人の構図が作品の重要な批評性の枠組みとして浮かび上がっているのも大きな特色である(注6)。

#### 結末の場面

“ある欠落”から回復(癒し)へ

- (1) エピローグの場面と一緒にされることも多いが、中心人物の“ある欠落”が癒え、回復への兆しが肯定的に語られることが多い。

- (2) しかし、それは単なるハッピーエンドではなく、時

には、自己像の獲得（自己客観化）の結果見えてきた、本質的なより大きな課題に直面する予感として、アイロニカルに描かれることもある。それは作品冒頭で提示された「ある欠落」以上の、よりひろがりのある視野をもつ問題との対決を暗示している。

#### エピローグ

プロローグとの対応・独特の詩的な描写

### 4 『植物性恋愛』の〈構造〉

松本侑子の作品は、『植物性恋愛』だけではなく、『巨食症の明けない夜明け』『偽りのマリリンモンロー』（一九九〇年五月、集英社）も同様に、『関係』発見型の小説構造をもっていると言わることができる。

以下、作品構造の特色を、場面毎のまとまりにそって各章の要点を簡単にまとめておく。

#### 冒頭の文体

象徴的エピソードの場面

- 場所……東京、六本木
- 時間……深夜一時（シンとのドライブの後、帰宅前に花を買った後）
- 事件……男が交通事故に会い、足が切断され、大量の血を流している
- 沙江子の心理

交通事故の男（足の切断・血だらけ）

男性

恋人、シン

沙江子……雄猫・夜（去勢されている）

女性

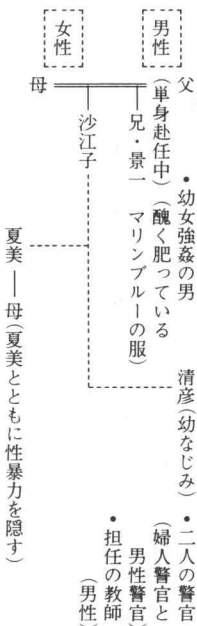
※大都市が舞台―都市の中の孤独・現代人

「一章、去勢された夜」は、大学生の沙江子の、現在の心象風景と感性が、深夜の都会の残酷な交通事故と被害者（男性）の象徴的なイメージに重ねられて語られている場面である。

物語は、六本木交差点での深夜一時過ぎの交通事故のエピソードから始まる。足を切断され、血を流している男の姿は沙江子の中に「忘れかけていた心の鉤裂き」を呼び戻し、酷たらしい光景におののきながらも「奇妙な快感」の中で「折れた脚」は「折れたペニス／去勢された男」となる。一章は作品の中の時間の流れから見ると、「二〇章 星のような孤独」と「二一章 始まりは終わり」の間に入る場面である。

#### 状況設定の場面

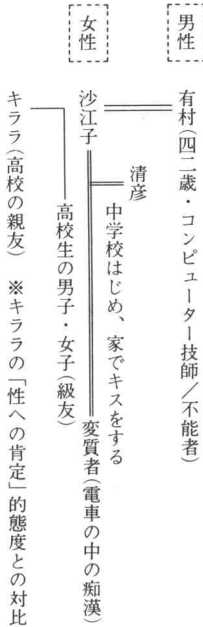
時代・舞台・人物・事件



「二章 春休みの花壇」―「五章 白いブラウス」。一〇歳の春休み、小学校の校庭で夏美と秘密の遊び「人形遊び」をしている時、ナイフを持った「肥った醜い青年」に殴打と強姦という性暴力を受けるが事実は隠し、婦人警官・中年の警官・担任・父母等大人達には殴って逃げたと嘘をつく。両親や担任教師の言葉から、自分には「人に知られてはならない何か」が身に降りかかったことを自覚しながらも、その意味は分からない。

### 展開の場面(1)

事件の自覚と沙江子の成長



「六章 花びらの渦のさなか」―「九 若木は揺れる」。中学一年の初め、幼なじみの清彦の部屋で好奇心からキスをするが、清彦の本の中に淫らな裸体の女の写真を見つけ、清彦も「好奇心で罪を分かつ共犯者」であると思ひ込む。

自分は強姦されたという事実を知った時、「被害を受けた娘はキズモノという常識」を退け、「単なる暴力」だ、汚された中でも卑しめられたのだでもないと思ひこもうとすることが「憤

りと屈辱感と悲しみ」を鎮める唯一の方法である。逆に「ペニスを暴力的に抹殺する残酷な空想」に浸ったりするが、「見えない傷跡」はいつまでも消えず、悪夢にうなされ続ける。暴力とともに性を自覚せざるをえなかった沙江子の中で、愛と性は分裂したままである。

一六歳の沙江子は、性に傷ついた女がどのように男性恐怖と憎悪を乗り越え、あるいと持ちつづけ、自分の性を肯定するのかもしれないのか等の多くの本を読みあさる。おとぎ話もまた「伝統的な洗脳教育、思想統制かもしれない」という、文化的装置としての「公序良俗物語」の現実を知ることとなる。

### 展開の場面(2)

不毛な復讐遊戯・愛と性の分裂

「一〇章 遊戯」―「二章 ぐりまの死」。沙江子は「豊かな肢体」をもつ、早熟な高校生に成長する。一六歳の夏休み、不能者である中年男性の有村と出会い、「不毛な復讐遊戯」の荒涼に気づきながらも倒錯した時間を過ごす。それは未知への好奇心からであり、「心を失った人形(人形遊び)」でいられることは、疲弊した精神になまめいた安らぎを与えるものであった。

沙江子の中で、性と男性を嫌悪する被害者の顔と、性欲の芽生えとたかぶり(不謹慎な身体溶解、不可解な体の反応)を感じることが分離したまま同居している。こうした分裂した意





帰り、シンと過ごす。この後の場面は、冒頭の交通事故の場面につながっている。

#### クライマックス

個性的描写と解釈・〈関係〉の発見

「二二章 光」「二三章 朝のサボテン」。ゲイバー「アンビバレント」へ行き、光と会い「優しく懐かしい気持ちに安らいでいく」。夜明け方、沙江子の部屋に光と帰り、男に戻った光との会話の中で、「光の告白」をきっかけに、自分の分裂した内部の葛藤が解放される。「告白」は一つの契機であり、二〇～二二章における沙江子の成長が前提となっている点が重要である。

つまり、光は「性暴力」の被害者、そして「少女強姦」の加害者でもあり異常な内面を持つ人間として設定されている。光の中では、性欲≡罪悪感であり、女性への憎しみ≡勃起・大切な女性の前では不能というころの傷と痛みを悩み続けている。その姿は、そのまま沙江子と重なり合う。

光の告白を聞きながら、沙江子は「男の性暴力」を決して許そうとは思わないが、「今は、目の前でむせび泣く光の痛みを受けとめ」「癒してやりたいときえ」思う。

#### 結末

作品世界の対象化（二四章 夜の行方）

ある解決・方向の暗示が、作品世界の「対象化」として語られている場面である。「薔薇色の朝」、沙江子の男性憎悪のシンボリックな存在である飼猫「夜」は、外へ出るべく毅然と鳴く。沙江子は「自分の心の行方」を思い遣るように「夜」を外界へと解放す。

#### 5、イメージとレトリック―「夜」「植物」「人形」―

##### (1) 去勢された「夜」

「夜」と名づけられたペットの雄猫は、沙江子の内面の象徴的なイメージ（存在）として登場する。この猫は、ゴチックで表現され、構成的にも、冒頭⇨シンや光との会話⇨末尾の場面と、沙江子の傷つき閉ざされた「内部」を暗示し、その深層と変化を語るイメージである。

「夜」の登場する場面は、一・一三―一四・一六・一九・二一―二四章である。「一章 去勢された夜」から「二四章 夜の行方」まで一貫して、沙江子の深層のある側面を語っているのである。

例えば、次の引用は、部屋に尿を振りまくことやメスを求めて外へいきたがる発情への嫌悪と男性憎悪の場面が重ねられている場面である。

この手術に踏み切った直接のきっかけは、シンとの口論による腹立ち紛れの勢いだった。しかし、沙江子が後ろめた

さに身をさいなむのは、その、いきがかり上の場合たり的な決定のせいではなかった。沙江子の男性性器への憎悪、去勢願望が夜去勢させているのではないか、という疑いだった。夜は沙江子の犠牲になっているのではないか…。

### 「一四章 罪」より

末尾「二四章 夜の行方」で、「夜」は去勢手術以後、外へ行くことをいやがっていたが、ここでは「毅然と鳴き」（媚びず甘えず、が強調されている）外の世界に出ていこうとする。これは、二二章で描かれた沙江子の心の解放のきっかけの具体的なイメージである。ただ、この場面で、沙江子の肯定的アイデンティティ（自己像）が提出されたわけではない。他者との関係のきつかけがようやく開かれはじめたにすぎない。

## (2) 二つの「夜」

冒頭「一章 去勢された夜」の場面は、二重の意味を持つている。一つは文字通り、深夜、交通事故で足が切断された男の残酷な場面の意味が、もう一つは沙江子の「内部」を暗示する存在としての猫の意味である。

詳細は省くが、交通事故で男の足の切断された男は、折れた血だらけのペニス（男根）⇓去勢された「夜（沙江子の内部）」の時空間⇓沙江子の男性憎悪／男根嫌悪と復讐⇓沙江子の愛と性の分裂の内面に、反転するのである。また、こうした内面を具体的に表すのが、去勢されたオスの飼い猫「夜」である。

## (3) 存在感覚としての「植物性」

「植物性」における植物の意味は、沙江子の自己像（アイデンティティ）のメタフォアとしての意味が重要である。これはまた、初めは、植物自体の描写から次第に、少女・思春期・大人の女性への存在感覚と身体（肉体）の比喩と重なり合う形で描かれている。以下の引用は、一六歳の沙江子がつ植物への憧れを語る心理描写の場面である。

沙江子はめしべとおしべの両方を持つ植物を夢見、憧れる。アンドロギヌスの強靱と神秘に惹かれ、そして彼女は両性の機能を包含する植物に嫉妬する。単体の閉じられた世界。（略）葉は次第に強さを増して、あらゆる隙間に忍び込み樹液をつややかにまとう。薔薇色の棘を、葉は突風に煽られたように戯れを装って強く突く。薔薇色の棘が鋭さを失いまろやかに膨らむ時、それは紫がかった濃い紅に色着く。透明な露に濡れた葉先は、弱々しく闇に紛れその奥へ臆病に滑り込む。しかし、若い幹は息も荒げず冷たい身体のまま、ゆるぎない植物性を失わずに静止している。快い陶酔感、秘密の罪と塩辛い記憶の日陰で、しなびた末なりの果実を結ぶにすぎない。それは青く硬い。

植物は、生死の境界の不明さも美しい。いつ死んだのかもあいまいなそれは、血を流さず、息も止まらず、その体から失われる熱も、初めから持ちえない。（略）植物の沙江子は、そんな花（生け花の「身体を無理にねじ曲げられ

た裸の少女や少年のような／＼不自然に造形された人工美」と「死んだ静けさ」をもつ存在（佐藤・注）にはなりたくないと思う。不自然なまま、永遠に開かぬ硬いつぼみのままではない。

（傍線は佐藤、以下同じ。「九章 若木は揺れる」より）

このように植物のイメージは、官能的でナルシスティックな文体で描かれるが、それは両性を同時に持つ植物の「単体の閉じられた世界」の強靱さと神秘性、「不自然なまま、永遠に開かぬ固いつぼみのままではない」過渡期の少女の成熟拒否（社会制度への批評）といった二面性を合わせもつ。

大学生になった沙江子は、シンへの恋しさとシンの持つ男のセクシャリティへの抵抗の間で揺れ動く。

彼女は独りで乾きを癒す単性生殖の植物にすぎない。人間としてシンの欲望の対象となることへの抵抗、シンの前で欲望を表すために、分かれたままの性と愛、被害者の顔と健康な若い女の顔。沙江子は身動きが取れない。

（「一七章 無人化」より）

次は、沙江子が大切に行っているサボテンに水やりをする描写の部分だが、ゲイの光に「どうして女の恰好して、女の言葉で喋るの。男のままでいなさいよ。でも、光くんは、男でいるのが辛いんでしょう。だから、女を装うんでしょう。それなのに女を苦手だなんて、あなたは一体何なの。まるで化け物じゃない。」と問い詰め、光の受けた性暴力と加害者としての「告白」

を聞く前の場面である。

サボテンは隠している。乾いた皮と鋭い棘の内側に、水々しく青く、ゼリーのように柔らかく震える半透明の身を、隠している。秘めているのは、水分と養分だけでなく、遥か遠い砂漠の記憶。それが脆ければ脆いほど、自らを包む表皮は硬く、己を守る棘は険しい。

一方でまたサボテンは、奇怪な身をさらして沈思黙考する。常に平静を失わず、しぶとく強靱である。たとえ水やりを忘れられても枯れず、地震にも揺れず、数カ月も生長の気配を見せず、姿を変えず、針の棘を武器にして昆虫も猫も人も寄せ付けず、独りで無表情に生きている。

沙江子がサボテンと暮らすのは、脆さと強靱さの両方があるせいだ。（「二三章 朝のサボテン」より）

サボテンの「脆さと強靱さ」、「奇怪な」身体と自己を守る棘の険しさは、そのまま沙江子の存在のイメージであり、光のそれとも通ずるものとして描かれている。そして光の「告白」の後、このようなサボテンのイメージは「互いに身を寄せ合えば、相手も自分も、突き刺され傷付く」と、他者との《関係》の中で対象化されることになる。

傷を負うのは強姦された者だけだと思っていた。犯した側も、傷を抱いていたから強姦し、それによってまた自分を責め、さらに傷ついているとは、そんな男も稀にいるとは、夢にも思わなかった。それにしても何故、サボテンはあんな

なにも鋭い棘をもっているのだろうと、沙江子は思った。壁を這う蔦のように絡み合うことも出来ない。竹の葉のように風にそよぎながら、さわさわと触れ合うことも出来ない。互いに身を寄せ合えば、相手も自分も、突き刺され傷付く。

(同「三章」より)

#### (4) “人形(遊び)”と《関係》

この作品の事件は夏美と沙江子の淫靡な“人形遊び”から始まる。それは、沙江子が性暴力を受けるきっかけになる遊びであり、同性の女性(夏美とその母)に性暴力を無かったことにされる「見捨てられた」経験と重なっている。

あの春の日の淫靡な遊びは夏美にとつても秘密だった。人形と人形の境界を行き来する危険な、しかし夢のような遊びが行われることは、もう二度とないだろう。

(「五章 白いブラウス」より)

しかし、この“人形遊び”は現代の人間関係の、言わば構造的な原理として存在することが、沙江子の成長とともに強調されることになる。それを語っているのは、高校時代の友人キララであり(「一章 春の音楽」、大学時代の一つ上の梨香達との会話(「一章 アンビバレント」)等であるが、とりわけ鮮明なのは、有村とシンと、光との関係によってである。ここでは、有村との場面を三箇所引用する。

沙江子の身体は人の形をした植物になる。例えば、地中に

埋まる二本の根が足の形をした朝鮮人参、ヨーロッパの植物誌に現れる伝説の有毒植物マンドラゴラ。それらは、声を出し、不思議な力を持つと信じられてきた。沙江子は人形の植物。男の指はその秘密を探り当てようと隅々を辿り、行きつ戻りつする。(略) 幼い頃の夏美との人形ごっここの記憶が甦ってくる。そう、沙江子是有村の人形。

高校生になった沙江子にとつて、“人形遊び”は不毛な復讐の遊戯として繰り返される。それは“植物”の存在イメージとも重ねられている。

有村の好きな日本人形になるための散髪。(略) 有村は沙江子の長い髪を、肩までのおかつぱ頭に切りそろえた。古い日本人形のように直角に揺れる髪。その揺れを男は愛でた。(略) 夏美との楽しい遊びを思い出す。心の中でささ

やくようにつぶやく。ピ・グ・マ・リ・オ・ニ・ズ・ム、素敵な遊び。しびれるような秘密の時間。

「素性を知らぬ者同士の煩わしきのない軽さ、危うきと隣り合わせの心地良さ」に一時のくつろぎを感じる沙江子にとつて、「心を失った無表情の人形のままでいられること」は「疲弊した精神に安らぎを与え」るものであったと語られている(以上、「一章 遊戯」より)。

しかし、こうした荒涼たる“人形遊び”、つまり自己愛の安らぎの姿には、「生身の人間」と真の《関係》が欠落していることに、やがて沙江子は気がつくことになる。

沙江子は男の前で人間でいたことがない。強姦の被害者だった時の沙江子は人ではなく、性の対象でもなく、男の自己充足のための道具だった。沙江子の性器は、男のマスターベーションの掌と同じだった。その意味で、彼女は男の体内に包含されていた。また、有村の前では、彼の快楽のための人形だった。有村は人形を愛しながら、その実、淫靡な行為に溺れる自分自身の姿に酔っていた。彼は人形愛に耽る自分自身を愛していた。やはり沙江子は有村の自己愛に包括れていた。どこにも、生身の彼女はいない。二人の男のマスターベーションの自己充足の中に組み込まれていた。

#### （一七章 無人化）より

自己充足のための「分身」を設定し、「孤独な閉じられた世界」「独りで事足りるオナニズムの世界」に生きるのは、何も有村だけではない。ファミコンに熱中するシンや、親友のキララのヘッドフォンもそのための道具ではないかと、「単独行為の安息」という現代的性格が語られる。

「植物（性）」のイメージが沙江子の存在感覚のメタフォアの中心的意味とすれば、「人形（遊び）」は他者との孤独な《関係》を語る主要なメタフォアと読むことができる。それは、自己（他者）の存在が無視された一方的な自己愛（自己充足的な遊戯）の姿であり、性の文化的装置の中で、性暴力・マスターベーション・無人化の現代社会等の表現に拡大されている。

その他にも、独特の文体・レトリックが表れたモチーフとしては、沙江子を脅かす「悪夢」の描写、制度としての「恋愛」の意味、不能者である有村や光の聞く作品的意味等がある。例えば、「恋愛」ここでは、人間としての、女性としてのアイデンティティ獲得のための過程を描く《関係》の記号として、また「恋愛」という制度の深層に潜む男性支配の文化的装置を照射するものとしての意味が重要である。

また、不能者達の設定は、一つは閉じられた「関係／単体」としての現代人の人間関係を語るための表現装置、逆説的に《関係》発見を語る記号としての意味が。もう一つには、時代と社会のジェンダー・セクシャリティの構造を、一種の被害者の側から光を当てる意味がある、と言うことができる。

## 6、多義性と文明批評

### （1）フェミニズム小説と自分探し

現代フェミニズムによる理論的挑戦にとつて「性暴力の政治学」のテーマは、「父権性（家父長性）」「ポルノ論争」「国家と性」「資本主義と女性搾取」等とともに緊急のテーマの一つである（注7）。性差別・文化制度（装置）論としては性的自由や快楽、表現の自由の問題と混同されがちであり、論ずる難しさはあるものの、ジェンダー・セクシャリティに対する暴力の問題として、男女の文化的差異を社会的支配的に位置づける構

造的な装置を明らかにする視点として、多面的に論じられはじめている。

また、こうした女性学の立場を、特に欧米の文学作品の中に具体的に探る小説批評論の提案も見られはじめる（ケイト・ミユレット『性の政治学』、ジュディー・M・ローラー『フェミニズム小説の政治学』、ゲイル・グリーン『ストーリーを変えろーフェミニズム小説と伝統』等。注8）。

それらは、小説論というよりは、フェミニズム思想による文化の見直しの一つの方法として小説が素材として取り上げられ、性差別やファルス中心主義・父権性の構造と文化的装置を浮かび上がらせるために位置づけられているものである。こうした「フェミニズム小説」の共通の課題は、「父権性の維持のためにつくられた女性像を壊していくこと」「抑圧から解放された、新たな女性像を探ること」にある（注9）。男性の側から、男性との関係によって定義された「つくられた女性像」を壊し、女性を抑圧している問題を明らかにし、女性にとって生きやすい状況や関係・世界を探っていくものである。

このような小説は、男性支配の社会制度・政治学の中で女性が真の主体性を獲得するための「自分探し」の構造を持つ作品となる。愛と性の分裂・母や妻等女性の性役割によって歪む女性像、身体（からだ）と精神に顕在化する食障害や心的異常（狂気）等の表現は、いわばマイナスの側から、真の自己が分断され、抑圧された現代の女性の位置や自己像（アイデンティ

ティ）の探究を語る文体となる。

また、男性によってつくられた文化・制度の見直しは、女性自身による言語（語り・表現）を通して、女性の「関係」や「世界」認識に具体的に言葉を与えていくこともある。少女や妻、母等を主人公とした「語り」、自伝的小説の方法等は男女の社会的政治的力学を意識化させていく一つの方法となっているのである。

例えば、『植物性恋愛』の場合にも頻出する性的欲望や男性に対する関心と嫌悪、男根恐怖等の具体的な語り（心理描写）におけるエロテックな語彙や表現は、女性像の美德（価値観）として男性側の論理から定義され、隠蔽されてきた制度や装置を「言語」のレベルから意図的に奪還しようとする批評的行為の表現でもあるのである。

ただ、このようないわばフェミニズムの戦略が作品の優れた文体や表現構造として結実しているかどうかについては、現段階では疑問が残る点がある。フェミニズム思想に必要な部分や構図・人物像のみを「父権制」や「セクシャリティ・ジェンダー論」の観点から取り上げ批評する態度、文学作品としての「構造」や文体・レトリックの「全体」と「部分」の関係が十分検討されていないというフェミニズム文学批評の方法的な狭さや観点の偏り、過渡期という特色をも配慮する必要がある。

## (2) 作品の批評性

このような観点から見たとき、『植物性恋愛』の特質と批評性については大きく、次のような三つの軸からとらえることができるだろう。

一つは、「愛されたい、でも支配されたくない」という沙江子の言葉に典型的にあらわれているように、「愛」と「性」の分裂を通して描かれる八〇年代における現代女性の「人間性（肯定的アイデンティティ）」と「関係」発見のテーマである。（恋愛は文化の産物である）以上、愛し方や愛され方、恋愛心理や感情の動き方や、告白と拒絶、女らしさと振る舞い等の深層には、当然時代と社会の政治学が横たわっている。「性暴力（少女強姦）」の被害者という形で、現代のマイナスのイニシエーションを受けてしまった少女沙江子が、自己の傷を抱えながら（内部）、その外部に「性暴力の文化的制度」の支配的な階層性を発見していく。それは肯定的な自己像の探究の過程であり、他者（男性・社会制度）との関係をいかにつくっていくかの過程でもある。5で述べたように、「植物」と「人形遊び」のメタフォアは、こうした課題に対する意識と無意識を独特の、官能的で詩的な描写（文体・レトリック）として描いたものと読むことができる。

二つ目は、「性暴力」「性的虐待」の構造と文化的・制度的深層についてである。現代人の生活と常識、教育・文化・深層に抜きがたく存在する男女の「セクシャリティ」の歪みと非人間

性の構造は、男性像・女性像、大人と子ども、同性（女性）による支配の増幅等の書き分けられた役割によって鮮明になっている。とりわけ、女らしさ・男らしさを決定づける〈感情教育〉の一つとして取り上げられている「おとぎ話」の論理の場面は、教育のもつ制度（装置）の仕組みをわかりやすく語っている（八章 眠れる森の美女）。これはまた、広義には人間関係や文化、国家（制度）と個人の間における差異の階層性（階級性）、つまり、「支配―被支配の構図」と言い換えることができる。

三つ目は、「人形遊び」の描写や沙江子も含めた不能者の設定による表現等に典型的に表れている「無人化」社会としての、真の人間関係が閉じられた現代人の意味についてである。過剰な情報、豊かな生活の内部で、真の「人間」と「関係」が忘却されている現代社会（都市）、それは閉じられた「自己愛」「人形愛」の世界として強調されている。

## おわりに

フェミニズム文学批評、特に小説論の現在は、フェミニズム思想の立場から作品の中に文化的な制度としての「事件」・男性の性差別と無意識・「母」「妻」の呪縛・マスコミや教育等の社会的支配力（文化装置）等を探ることが多い。こうした方法はとすると、文学作品を一種の社会学や心理学の素材として

読む態度に傾斜しがちであり、作品の批評方法というもう一方の視点が不十分であると、文学作品の特質と意義を軽視し、時には作家の発想等を表層的なレベルで「告発」することにつながる。

戦後小説・現代小説を考える時には、部分（細部）としてのイメージや設定・事件・人物の行為等のみをつなぎ、そこから思想を抽出するのではなく、まず、全体としての（構造）との関係から、立体的に細部の描写の意味や役割、その効果を位置づけ、とらえる必要がある。

本稿では『植物性恋愛』を例に、現代小説における「解体・崩壊型」と『関係』発見型」という二つの型を示し、こうした（構造）のもつ「批評性」を踏まえながら、方法やレトリック・文体等の「部分」を有機的にとらえる視点について述べたものである。

### 〔注記〕

- 1、例えば、鈴木貞美『日本の「文学」を考えるー文学史の書き換えに向けてー』（角川書店一九九四年）、クレマン・モワザン（広田昌義訳）『文学史再考（文庫クセジュ）』（白水社、一九九六年）等参照。
- 2、この作品では、二一歳の女子大学生・沢田時子を主人公に過食と拒食という「食障害」の背後に母と娘の関係、成熟と成熟拒否の間で引き裂かれる八〇年代女性のアイデンティテ

イ探究の課題を探っている。

- 3、拙稿「山田詠美『晩年の子ども』論」『国語国文学報 第五二集』（愛知教育大学国語国文学研究室、一九九四年）。
- 4、拙稿「『ガラスの靴』論（上）（下）」『愛知教育大学研究報告、第四一・四二輯』（一九九二・三三年）。「ジングルベル」論」『国語国文学報第五一集』（愛知教育大学国語国文学研究室、一九九三年）。
- 5、拙稿「安岡章太郎『質屋の女房』論」『愛知教育大学研究報告、第四五輯』（一九九六年）。
- 6、拙稿「大岡昇平の言語技術ー歩哨の眼について」における〈知覚〉の遠近法」『国語研究 第四号』（愛知教育大学大学院、一九九六年）。
- 7、井上輝子・上野千鶴子他編集『日本のフェミニズム論（全八冊）』（岩波書店、一九九五年）、大越愛子『フェミニズム入門』（筑摩書房、一九九六年）、上野千鶴子・加納実紀代他編集『ニュー・フェミニズム・レビュー①』（学陽書房、一九九〇年）等参照。
- 8、山下悦子『マザコン文学論ー呪縛としての母ー』（新曜社、一九五五年）、上野千鶴子・富岡多恵子他『男流文学論』（筑摩書房、一九九二年）等。
- 9、渡辺和子『フェミニズム小説論』（柘植書房、一九九三年）。

（さとう よういち）